

「考え、議論する道德」を実現する 道德教育論の実践
—模擬授業を生かした道德授業力の育成—

東田 充司

「考え、議論する道徳」を実現する 道徳教育論の実践 — 模擬授業を生かした道徳授業力の育成 —

基盤教育機構教授 東田 充司

(「道徳教育論」担当)

はじめに

1958年の特設道徳以来、「領域」であった道徳は教科ではなかった。50余年の時を経て、2015年に一部改正された学習指導要領が告示され、「特別の教科 道徳」として教科化された。現行の2017年版学習指導要領により、従来の副読本や補助教材から検定教科書の使用が始まり、評価（数値評価は行わずに記述による）が開始された。ただ、教科化されたとはいえ教科としての道徳の免許状は設けられず、引き続き原則として学級担任が担当する。この「特別の教科 道徳」は、小学校は2018年度、中学校は2019年度より全面実施となった。

従来の道徳の時間については、「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った授業」「決まりきった答えを言わせたり書かせたりする授業」¹⁾が多いのではないかという課題も指摘されてきた。教科化された道徳で求められる「考え、議論する道徳」を実践するために修得すべき道徳教育論で扱う内容は、専門教科として学ぶのではない。それだけに、時間数からも大きな制約がある。

筆者は長きに渡り、同一法人の小学校に勤務してきた。多くの教育実習生を担当したが、道徳を指導させる機会は少なくなかった。教員養成を主目的とする学部生に比べて、教員免許状取得が卒業要件でない教育実習生は、授業運営に関する実践的な経験に乏しい。最初の授業体験はホームルームでの講話から、それも道徳で扱う情報リテラシーを指示してきた。また国語専攻の場合、読物資料を使い1単位時間で完結する道徳での授業を、教育実習の導入段階で指導させてきた。

教員養成を主目的としない本学における教職科目に課せられた役割として、教員免許状取得希望学生が教育実習で教壇に立った際、必要とされる基礎的な授業実践力を育成することが挙げられる。実践的な学習指導案作成を含む教材研究に裏打ちされた継続的な模擬授業の実施を前提として、道徳教育論を実践した。日々求められる基礎的技術指導から授業の主発問設定に向けた教材研究の実際、授業場面での発言の捉え方や話し合い活動に求められる授業者としての配慮など、2020年度秋学期における道徳教育論での授業実践を報告する。ここに大方のご批評をお願いする次第である。

1. 道徳教育と「特別の教科 道徳」

道徳教育論で担当してきた受講生が受けてきた道徳教育の印象は、全般的に薄いものであった。もちろん、毎週の道徳を楽しみにしていた、特に話し合いが楽しかったといった「考え、議論する道徳」を先取りするものもあるが、ごく少数でしかない。最初から誰もが分かる教師が求める答えだけを形式的に話し合う授業、登場人物の心情描写を詳しく考える国語との違いが分からない授業という報告もある。副読本類や「心のノート」の使用頻度が担任によって違うのは、テストがないからという意見も見られる。さらに、クラブ顧問や先輩から、また学校行事によって道徳を学んだという声もある。そもそも道徳教育論で扱う道徳教育の範囲の理解にも、大きな差異が見られる。

道徳教育は、週に1時間の授業だけで目的を達成するのではない。教科化された「特別の教科 道徳」でも、引き続き「道徳科を要として学校の教育活動全体で行う」とされる。現行「中学校学習指導要領解説 総則編」では道徳の特別教科化に係る学校教育法一部改正について、以下の通りに配慮事項を挙げている。²⁾

ウ 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

学校における道徳教育は、道徳科を要として教育活動全体を通じて行うものであることから、その配慮事項を以下のように付け加えた。

- (ア) 道徳教育は、道徳科を要として学校の教育活動全体で行うことから、全体計画を作成して全教師が協力して道徳教育を行うこと。また、各教科等で道徳教育の指導の内容及び時期を示すこと。
- (イ) 各学校において指導の重点化を図るために、生徒の発達の段階や特性等を踏まえて中学校における留意事項を示したこと。
- (ウ) 職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動、地域の行事への参加などの豊かな体験の充実とともに、道徳教育がいじめの防止や安全の確保等に資するよう留意することを示したこと。
- (エ) 学校の道徳教育の全体計画や道徳教育に関する諸活動などの情報を積極的に公表すること、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図ることを示したこと。

道徳教育論は、教育職員免許法第5条第1項別表第1に基づく中学校教員免許必修科目である。これらの配慮事項を念頭に置きながら、教科書使用と評価という教科化された授業を実践するために、主発問（中心発問）づくりを具体的な授業目標とした、そして、「考える道徳」、「議論する道徳」への道徳の新たな方向性を把握し、主体的・対話的で深い学びが得られる授業を担当する為に必要な実践力基礎の育成を、15回の授業で修得すべき到達目標とした。

2. 道徳授業力育成のための10項目設定

文部科学省は、道徳教育の進捗状況を把握する目的で道徳教育実施状況調査を2012年に実施し、「道徳教育実施状況調査の概要」³⁾を発表している。その中に、9項目の指導方法の校内研究状況についての質問項目がある。

表1. 道徳の指導方法についての校内研究実施状況

	小学校	中学校	合計
1 読み物資料の利用	66.0%	76.6%	69.4%
2 資料を提示する工夫	61.7%	58.9%	60.8%
3 発問の工夫	67.9%	70.0%	68.5%
4 話合いの工夫	61.1%	61.7%	61.3%
5 書く活動の工夫	44.0%	38.5%	42.3%
6 動作化、役割演技等の表現活動の工夫	42.8%	14.5%	33.7%
7 板書を生かす工夫	43.7%	34.1%	40.7%
8 説話の工夫	29.9%	26.5%	28.8%
9 ICTの利用 (パソコン等)	20.5%	22.3%	21.1%
10 研究していない (※10を選んだ場合には1～9を選択しないこと)	13.6%	7.2%	11.6%

この調査は、教育政策の方向性を目的に第1期教育振興基本計画に基づく道徳教育の進捗状況を把握したものである。すべての公立小中学校を対象とした調査であり、道徳教育の全国的な実施状況が読み取れる。指導方法についての校内研究実施状況の実態把握は、道徳の教科化に向けたものとも考えられる。「考え、議論する道徳」を実現させるためには、9項目すべてが重要な構成要素となるものであろう。

1～4の項目については、従来型の授業方法としても重要であり、いずれも校内研究を実施している学校が過半数を超える。しかし、5～9の項目についての実施率が相対的に低い。文章による評価が求められる教科化では、書く活動が毎時間必要となり、関連する板書を生かす工夫も必要である。道徳での主体的対話的で深い学びには、動作化や役割演技、指導者による説話は必要不可欠である。

道徳教育論での道徳授業力育成のために必要な項目を設定するにあたり、上表2～8の7項目に、導入、発言の取り上げ方、時間配分の3項目を加えた10項目とした。1の読み物資料の活用は、検定教科書使用が前提の教科化の前提となることから省いた。9のICTの利用は、本学が昨年度より全面採用するBYOD (Bring Your Own Device) がコロナ渦で活用されていると解釈した。追加した3つは、筆者の経験則より、教育実習生が研究授業を実施後に共通して課題となるものである。

3. 模擬授業実施に向けての導入段階

中央教育審議会第197号答申の中で、「主体的、対話的で深い学び」の実現の達成には、「形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育む⁴⁾」という観点から、学習の在り方そのものの問い直しを含むものである。道徳授業では、現行学習指導要領の配慮事項にある「生徒自身が人生の課題や目標に向き合い、道徳的価値を視点に自らの人生を振り返り、これからの自己の生き方を主体的に判断する」「色々なものの見方や考え方があることに気づき、それぞれの考えの根拠や前提条件の違い、特徴などを捉え、自分の考えを多面的・多角的な視点から振り返って考える」ことが求められる。

単にグループ・ディスカッションやグループワークを採り入れることだけでは、現行学習指導要領が求める「考え、議論する道徳」とはならない。教育実習でどの程度の授業を実施することが可能かどうかの議論とは別に、実践力育成に向けて本来あるべき道徳授業の目標像を明確に示す必要がある。2回目で前年度の教職概論受講者の中から模範になるであろう学生を指名して発表をさせ、3回目で、「考え、議論する道徳」を実現する模擬授業を筆者が実施した。

2回目の授業では、受講生による「特別の教科 道徳」と従来の道徳の授業との違いを発表させた。1回目の事後課題をLMS (Learning Management System) で提出させた中で、実際の道徳教科書を確認にいった受講生を選定し、個別に授業での発表を促したものである。綿密な11枚にも及ぶプレゼンテーション資料を元にした意欲的な発表は、ともすれば受け身になりがちな教職科目への参加意識を一変した。以下、発表後の受講生の代表的な感想を挙げる。

- ・ 今回の発表を聴いてすごいなと思った。人前であんな風に話せることもそうだし、何より事後学習として自ら調べていることがすごいと思った。中身も考えさせられる内容だったし、私も人に考えてもらえるきっかけを作れるような人になりたいと思った。また道徳の在り方も考えて直していこうと思った。
- ・ 今日の発表から、道徳についてこれからより深く考え、自分の考えを大きくしていけたらなと思った。まるで本当の先生みたいな発表で、すごく分かり易かった。同じ学年なのにすごいなと思った。自分も頑張らなければと感じた。
- ・ 今まで受けてきた教職科目の授業の中で、最も印象に残ったのが今日の発表でした。教師を目指すなら、あそこまでのことが出来る様に努力する必要があると感じたし、自分が実際に受けていない「特別の教科 道徳」だからこそ、きちんと知るべきだと思いました。
- ・ 今日の発表「道徳に正解は無い」に共感できました。深く話し合わせるべきだと思います。

3回目の授業では、筆者が「主体的、対話的で深い学び」を実現する模擬授業「仙人」⁵⁾を行った。この物語は、芥川龍之介の作品である。昔大阪に奉公に出てきた権助が人生の儂さを憂い、口入れ屋の番頭に不老不死の仙人になりたいと相談したところから始まる。番頭が医者に相談すると、その女房から「うちへよこせば二、三年中に仙人にする」と口から出まかせを言う。翌日やってきた権助に対し、女房は「二十年間奉公すれば仙人になる術を教えてやる」と言い、以後二十年間無休で奉公させた。二十年後に仙人になる術を求めた権助に対して、女房は無理難題を押し付けてその場逃れをしようとした。しかし権助は仙人になれ、空高く昇っていったのであった。

「一番得をしたのは誰か」を中心発問に、同一人物を挙げたグループ毎に意見を発表し合う中で主題を話し合い、代表者による発表を行った。権助は仙人になる夢を実現させた上で、不老不死である永遠の命を手に入れた。番頭はすべてを他人に押し付け責任転嫁したにもかかわらず、万口入れ所という看板を証明して評価を高めた。医者は自分に責任が一切ない中で、20年間無給で権助を助手として働かせることができた。女房は20年間家事を無給でさせ楽をした上、権助を仙人にすることで評価を高めた。

どの登場人物を選んだとしても、誰もが得をしているところに、この教材の道徳的価値がある。権助は一見損をしている様に見えるが、最後は望み通り仙人になれたのである。医者や女房はもちろん、口入れ屋の番頭は得のみしかない。権助を選んだ場合のみ、損得を天秤にかけて判断するために本文に立ち戻る必要がある。単純に比較するだけではないところに、この課題設定の持つ教育的意味は大きい。

ここでは誰もが得をしており、答えはひとつではない。公德心を考えるにあたっては、誰にとって何を第一義にするかによる視点や価値観を持つ必要がある。自分と同じ意見の仲間と話し合うことで考えが補強される。最終場面での全体発表で多面的な考え方を理解できた後も、自己の意見を変える必要がない。ここに主体的対話的で深い学びがあり、考え、議論する道徳が達成できる。受講生の代表的な感想を掲載する。

- ・他の班の意見を聞くと、自分にはない視点からこの物語を捉え、納得するだけの理由として得心できた。各自が違った価値観の元に物事を捉えることが、十分に理解することができた。
- ・同じ教材文を読んでいるのにもかかわらず、ここまではっきりと意見が分かれることに驚いた。人の意見を聞いている中で別の意見が変わったり、最初の考えを変えるはずなのに、自分の視点でグループワークをしたことで、やっぱり自分の考えが一番正しいと思えた。
- ・グループワークにより気付いた内容が増えていき、他のグループの発表によって物語の主題を深く理解していく自分が分かった。権助がいなければ、そもそも誰の得も起こらなかったという意見に、作者の意図を垣間見た思いがした。
- ・権助の「元々仙人説」には驚いた。深い心情理解を超える点で、国語との違いを理解した。

4. 模擬授業実施に向けての授業技術指導

授業を受ける立場から授業を行う立場への意識転換の難しさは、教員免許状を取得する過程で誰もが体験するものである。同じ受講生の仲間が完成度の高い発表を行ったことに加え、自分たちが行うべき模擬授業の師範を体験することで、ある程度の意識の変化ができたと判断する。

道徳授業力育成のための10項目は、道徳教材を扱う具体的な授業場面を想定することで初めて指導が可能なものと、必ずしもそれには制約されないものに分かれる。前掲の道徳の指導方法のうち選定した7項目は、通常授業を運営する中で繰り返し意識させ実体験させることを主体にして修得させた。資料提示、発問、話し合い、書く活動、動作化、表現活動、板書、説話がそれにあたる。それに対し、筆者が教育実習生を受け持つ中で課題として付加した3項目（導入、発言の取り上げ方、時間配分）は、定番教材と呼ばれる道徳教材とその指導事例を取り上げて実体験を求めた。

板書の工夫を例に、通常の授業での指導を挙げる。道徳教育論が行われる総持寺キャンパスは昨年度より開設された新しいもので、黒板ではなくホワイトボードである。ホワイトボードの持ち方、ホワイトボードとの適正距離とホームポジションを維持する全身の使い方、板書案の作成と適正な文字の大きさと文字間隔や強調方法等を師範した。全員が板書する指示を毎時間行い、相互評価を行った。チョークを使った黒板への板書は、安威キャンパスに向向の事後課題とし、学院歌の歌詞を書かせ、写真データをLMS上で提出させた。15回の授業終了時には、各自が一定の成果を確かめることが出来ることを目指した。

授業では学修記録（ラーニングログ）を書かせた。教育現場での評価を意識した書く活動の工夫を兼ねたが、実際の授業場面を想定して手書きによった。回数を重ねる中で、字が丁寧になる様子が見て取れた。鉛筆の持ち方や姿勢、ノート類の置き方などの指示は最小限しかしなかったが、グループ活動報告書を代表者に書かせる中で、自然に相互確認する様になっていった。関連してプリント類の配布方法や安全管理、回収方法や指導者への手渡し方等は、意識化の推進に寄与した。

道徳教材としては、「バスと赤ちゃん」⁶⁾、「卒業文集最後の二行」⁷⁾、「絶やしてはならないー緒方洪庵」⁸⁾を事例に、教材研究と実践事例に重点を置いて授業を展開した。中学校1単位時間50分の時間配分を、導入10分、展開30分（範読3分・補助発問6分・中心発問18分・補助発問3分）、まとめとノート記入10分として基本型を提示した。本時の目標を達成する主発問と補助発問の立て方、生徒の実態に即した導入（説話を含む）のあり方を話し合わせ、その意見の採り上げ方の具体法の数々を紹介し、実際にグループ内で体験させた。毎時間の取り組みは事後課題としてまとめさせ、次時に全員のまとめを共有するとともに相互評価を行った。授業に参加する意識はさらに高くなっていき、模擬授業のテーマ（情報モラル）に即した発表を申し出た受講生が現れた。11枚のスライドによるプレゼンテーションは完成度が高く、プレゼンテーションコンテストにも個人応募し、全国本選に進んだ。道徳教育論の授業そのものが、主体的対話的で深い学びとなっていった。

5. 模擬授業の実施

扱う教材は、情報モラルとした。受講生が教育実習時に出向いた際に、道徳だけではなくホームルーム等での短時間教材とするほか、広くモラル指導を行う際の導入としての可能性を勘案した。この観点により、あえて8社の検定教科書教材や過去の副読本教材ではなく、NTTDoCoMoが全国で展開する「スマホ・ケータイ安全教室」⁹⁾の教材を使用することとした。2004年から開始された安全教室は、スマートフォンや携帯電話の利用に関連した危険やトラブルを未然に防ぐために、対応方法を啓発する目的を持つ。多数の児童生徒を対象に、専門担当者が1単位時間完結の講話を可能にするプレゼンテーション資料をもとにしている。この資料は公開されており、中学生対象のものは5項目53頁からなり、目的と時間に合わせた選択が可能である。「SNSで気をつけたいこと」、「コミュニケーションアプリで気をつけたいこと」、「スマホなどでの時間の使い方」、「フィルタリングを利用して危険から身を守ろう」、「スマホやケータイをスマートに使うルールやマナー」がその項目である。

今回は、いじめ対策への導入の可能性が考えられること、年齢が若くスマホ活用の体験が説話へ応用ができるという点から、「コミュニケーションアプリで気をつけたいこと」を選択した。本



図1 スマホ・ケータイ安全教室教材

時の目標と主発問を設定し、グループワークで相互に予想される生徒の反応を確かめ、学習指導略案を作成し模擬授業を実施するという指導過程を設定した。6枚のスライドの活用範囲は任意とし、考え議論するに値する主発問に重点を置いた。9回目の授業で提示し、10・11回目にグループ内授業を全員が行い、11・12回目に希望者のみ全員の前で模擬授業を実施することとした。グループワークを終えた段階での授業計画の一例を挙げる。

- ・主発問：相手と顔を合わせて会話をするという事はなぜ大切であるのか考えてみましょう。補助発問として、二つの質問をし、主発問に対しての答えをクラスで考え、その後に、各グループで発表する。クラスとして一つの意見を作る。まず「LINEでの会話についてのメリット・デメリットについて考えてみよう」

予想する回答は「メリット：約束など記憶したいものをトークに記憶する事が出来る、簡単に連絡を取る事が出来る。デメリット：相手の表情などを見る事が出来ない」等であると考え。次に「顔を合わせて話すメリット・デメリットについて考えてみよう」予想する回答は、「メリット：表情を見る事が出来、気持ちが伝わりやすいデメリット：話した内容を忘れてしまう」等であると考え。

最終のまとめとして「文字だけのやり取りに頼りすぎず会って話す事も大切にする」に結論づける。生徒が考えやすいように身近に感じる質問を考える事が大切である。

- ・主発問：自分にとっても、相手にとっても、気持ちのいいコミュニケーションアプリの使い方とは、どういうものだと思いますか。

予想される生徒の回答：仮にそのやりとりを誰が見ても、内容を理解できる、また不快な気持ちにならないような使い方です。自分の使い方を見直してみて、絵文字を用いることで表情を表現して、そのときの気持ちを相手に伝えようとしているところは良い点だと思いました。反対に、悪いと感じた点は、言葉づかいが少し悪いところや、伝えたいことが二通りに読み取れる書き方をしている点です。

話し合い活動のテーマ：「私のコミュニケーションアプリの使い方の良い点・悪い点」

発表の概要：グループごとに主発問に沿って、話し合いをさせる。その後、全体で代表者の発表を共有する。

本時のまとめ：文字だけのやりとりでは、自分の気持ちは相手には伝わりにくいものです。相手に伝わる文章かを考え、心掛けましょう。

- ・主発問：コミュニケーションを取る方法はいくつあると思う？授業の展開：コミュニケーションの方法を考えさせた後、コミュニケーションの定義をグループワークとして辞書などで調べさせる。実際には、情報の伝達だけが起きれば十分に成立せず、意志の疎通や、心や気持ちの通い合いが行われることではじめてコミュニケーションが成立する。そこで、直接に行うコミュニケーションについてグループごとに話し合い、確認させる。

予想される生徒の回答：「メール・電話・SNS・直接・手紙」など様々な方法がある。話し合い活動のテーマ：スマホを用いて確実にコミュニケーションが取れるのか。本時のまとめ：直接のやりとり以外で頭の中のイメージを伝えるのも難しいのに、間接的にやり取りするスマホでのコミュニケーションはより伝達が難しい。間接でのコミュニケーションは、より配慮が必要である。

全員を前にした最終模擬授業での授業者は、受講生28名のうち4名が希望し、11・12回目に分けて実施した。30分を目安にしたが、「受けている30分はとても長く、教える30分はとても短く感じた」というある授業者学生の感想通り、時間配分に誰もが大きな課題を残した結果となった。半面、導入と発言の取り上げ方には、ここまでの大きな成果が表れた。全員が本時の目標に直結する実体験を元にした説話を交えた導入を実現させた。3回以上のグループワークを実施した上で、全体への共有方法も、求められる水準を達成した。例年の道徳教育論で行っている希望者による模擬授業に比べて、計画的に実体験を重ねてきた成果が見られた。受講生の模擬授業後の感想の一部を挙げる。

- ・スマホの使用率やLINEの使用率など自分で調べたデータをクイズ形式にして生徒に出題していたことで、より生徒の興味を引けていたし、主題にスムーズに入ることができていたのでその方法は自分も取り入れようと思った。自分の家族の話から入ったが、授業で扱うテーマをより身近に感じさせるという点ですごく良い導入であったと思う。SNSにおいて誤解が生じるのは他人事ではなく、身近に起きているということを生徒側が感じることもできた。授業と関係のない話をしていくわけではなく、導入の最後では扱うテーマにしっかりと関連付けていたところが良かったと感じた。今回の模擬授業を受けて一番感じたのは、生徒の意見を汲み取る力が教師には必要不可欠であるということである。他の科目と違い、答えがひとつに限られていない問題を多く取り扱う道徳においては、特に必要とされる力ではないかと考える。生徒の意見を聞き、板書する際はしっかりと生徒に耳を傾けることが重要であると感じた。「考え、議論する道徳」の模擬授業を受けてみて、講義形式との違いを改めて感じさせられた。私は「議論する」という要素が非常に有意義な活動であると思った。なぜなら、1人で考えてまとめた意見が、他人と共有し議論することでより深まったと実感できる場面があったからである。この授業ではより生活に密着した、実用的な力を養うことができるのではないかと感じた。(授業者でない受講生)
- ・私が模擬授業から学んだ指導技術や指導方法は、2つあります。一つ目は、授業の内容に入るまでの導入部分を生徒にとって分かりやすく身近なものにするということです。模擬授業をやってくださった人は、普段の生活で起きたことや、興味をひく本などを使って導入部分を行っていたのがとても印象的で、その導入部分をうけてスムーズに授業の本題に入ることができたと思いました。そのようなことから、授業に対する生徒の集中力にも繋がると思ったので、私も、授業内容と普段の生活での出来事をうまく結びつけて、分かりやすい導入部分を作りたいと思いました。

2つ目は、生徒から出た意見のまとめ方や、言い換え方です。模擬授業を受けていた時に、生徒から出た意見をうまく言い換えられているものと、誘導のようになってしまって意見の内容が少し変わってしまっていると思ったものがありました。授業をする側としては、意見を考えた本人ではないので、難しいところだとは思いますが、その意見がどのような事を指すのかを見極めて、時にうまく言い換えたりすることで授業の進行に効果を示す形の見解に変化させられるようにしたいと考えました。これらのことから、「考え、議論する道徳」の授業では生徒の意見が重要な要素になり、そのためにグループワークなどで考えることは授業の中でも一番大事な部分だと思いました。(授業者でない受講生)
- ・NTTDoCoMo教材「コミュニケーションアプリ」についてのスライドをもとに行った模擬授業から、私が学んだ指導方法や指導技術は、授業のはじめの導入や話をするうえでの具体例など、生徒の興味を引き出す工夫を施し、それを生徒に伝える・考えさせることによって、より

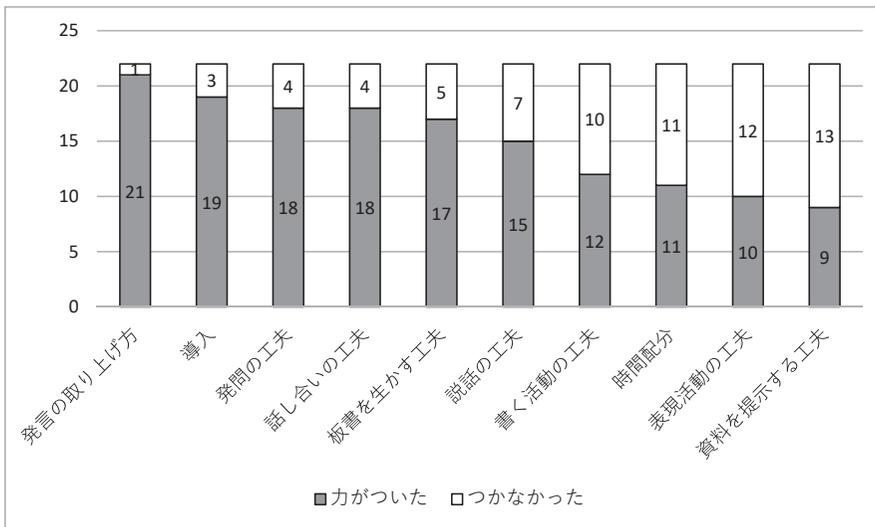
わかりやすいイメージをもたせるといったことである。例えば、Aさんの模擬授業では、最近問題になっている芸能人の自殺のニュースを確認してみたり、日本は自殺が多い国かどうかを、OECDやG7の国のなかで比べたときの具体的なランキングの結果と数字を伝えていたことである。また、Bさんの模擬授業では、授業の冒頭でLINEの使用率のクイズを入れるなど、授業内容に合わせた指導をするうえでの工夫が見られた。

この上で、「考え、議論する道徳」について、私は生徒が主体的に授業に参加しないと、本当の意味での「考え、議論する」ということがいえないと考えた。生徒が自分から「自分はこう考える」「(ペア・グループ・クラス全体の人の)意見・考えにここが共感する」というような発信が共有できるような授業を展開することが教師に求められていることであり、そのような授業をクラスで作っていかないといけないと考える。それができてこそ、「考え、議論する道徳」と言えると結論づける。(授業者である受講生)

6. 模擬授業を生かした授業の結果分析

最終授業でアンケートを実施し、28名の受講生のうち22名から回答を得た。主発問を中心に模擬授業を行った道徳教育論としての到達目標10項目の修得状況を自己評価させた。回答にあたっては、教育実習の研究授業に臨む際に求められる必要な力がついたかどうかという観点で行った。

表2. 模擬授業を含む道徳教育論で力がついた項目 (複数回答)



道徳教育実施状況調査での7項目で最上位にあった「資料を提示する工夫」が最下位となった。教科化に伴い教科書使用が前提となった関係で、授業内での指導が弱かったものをそのまま反映していると判断する。ただ、「表現活動の工夫」は、教科化では最も必要であり、動作化や役割演技

の指導をこの授業内で繰り返してきた。道徳教育実施状況調査でも、極端に低い（中学校は14.5%で小学校の42.8%に遠く及ばない）ことから、教科担任制の中学校教員には難しい課題であるかもしれない。発言の取り上げ方、導入、発問の工夫、話し合いの工夫、板書を生かす工夫、説話の工夫の6項目については、目標を達成したものと判断する。

模擬授業の実施希望者は4名に留まったが、12名（54.5%）が現時点では希望すると回答した。その時点で希望しなかった理由は、受講生の発表（グループワークでの発表を含む）水準が高いことを挙げ、その時点での自分の力不足と結論づけたものが大部分であった。今回の道徳教育論での実践は、筆者が担当する1年次教職必修科目である「教職概論」との関連性が高い。下位3項目の成果達成は、道徳教育論単独で成し得るものではない。模擬授業は安易な気持ちでさせるものではないが、いかに前に立つ機会を効果的に設定していくかを今後の課題としたい。

終わりに

学校教育全体で行う道徳教育の要である「特別の教科 道徳」を2単位の道徳教育論で学ぶには、時間的な制約が大きい。教育実習時に困らないだけの基礎的な実践力を修得させるために、授業は厳しく行い、数多くの課題を課した。換言すれば、それだけの努力を必要とするのが開放制教員養成制度に基づく教員養成を主目的としない大学での教職科目の使命であるに違いない。

注

- 1) 道徳教育アーカイブ. “「道徳教育アーカイブ」について”（更新日2020年5月8日），<https://doutoku.mext.go.jp/>,（参照日2021年1月8日）
- 2) 文部科学省編『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』東山書房，2018年，p.10。
- 3) 文部科学省『道徳教育実施状況調査の概要』2016年，p.9。
- 4) 文部科学省『中央教育審議会第197号答申』2017年，p.26。
- 5) 東田充司『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた独自道徳教材の可能性』追手門学院大学教職課程年報，2019年，pp.15-24。
- 6) 中野茂子『新・中学生の道徳 明日への扉1』学研教育みらい，2021年，pp.42-45。
- 7) 一戸冬彦『中学校の道徳 自分を見つめる3』廣済堂あかつき，2021年，pp.36-40。
- 8) 文部科学省編『中学校道徳読み物資料集』廣済堂あかつき，2013年，pp.42-45。
- 9) NTTDoCoMo. “スマホ・ケータイ安全教室”（更新年2020年），<https://www.nttdocomo.co.jp/corporate/csr/safety/educational/>（参照日2021年1月8日）

参考文献

江島顕一『日本道徳教育の歴史 近代から現代まで』ミネルヴァ書房，2016年